

5.【村研第 50 回記念大会について】

第 50 回大会を引き受けて

東北学院大学 岩本 由輝

遠野といえば、皆さんそれぞれの思い入れがあるのであろう。日本村落研究学会が村落社会研究会、いわゆる村研として創立されて以来、50回目の節目の 2002 年大会を遠野で開催したいとの申し入れが事務局からあった。遠野での開催ということになると、学外に出るわけであるから私の大学からの補助は期待できない。そのかわり、私の一存で引き受けることができるので、開催に必要な段取りをつけるだけということで引き受けることにした。

そのさい、遠野で一番心配されるのは宿泊ということである。ホテルと名のつくものはあるが、収容力がない。民宿に分宿ということになるのも煩わしい。そこで私がいささか関係している遠野博物館に聞いてみたら、目下、宿泊 100 名ほどの研修センターを建設中とのことであった。竣工は 2001 年 7 月ということなので、2002 年大会には十分間に合うことがわかった。研修センターということであるから、会場とセットできるので好都合である。

そこで開催期日であるが、遠野の気候から考えて 10 月中旬がよからうということで、2002 年 10 月中旬の土日をあてるにし、まだ未完成のセンターに予約を入れておいた。2002 年のカレンダーが明らかになった時点で、期日を確定したいと考えている。

ところで、遠野が人々に魅力を抱かせるのは、『遠野物語』の存在である。1908 年の晩秋に柳田國男が水野葉舟の案内で自邸を訪れた遠野出身の佐々木喜善から、その後、何回かの聞き取りでまとめたものが『遠野物語』である。1909 年の旧盆の頃には、上梓を前に柳田は遠野を訪れている。そこに出てくる 119 にのぼる話は確かに多いが、かつてこの農

山漁村では古老といわれるような人は、こうした類の話の20や30ぐらいは知っていたものである。私も1944年に東京から相馬の田舎に疎開してきたとき、近所の年寄りからこうした類の話をずい分聞かされたものである。そうした素地があつて『遠野物語』を読んだのと、大学に入って教養課程で『遠野物語』を紹介されて読んだのとはずい分違うものがあるだろうと私は考えている。そして、私は遠野では『遠野物語』が意外と読まれていないことも知っている。「『遠野物語』なんて、どこの話」という反応を示すのは、私にはきわめて健全に思える。私に、「岩本さんもいい年して、遠野物語でもあるまいに」と逆を喰わせてくる人もいることも事実である。たしかに、遠野の町を歩けば、観光としての『遠野物語』にまつわるものに満ちあふれている。酒から饅頭まで、それこそ辛党から甘党にまで『遠野物語』の名聲を活用している商品に事欠かない。しかし、遠野の人は、それはそれとして『遠野物語』については醒めている。「遠野物語、それで喰えるのか」という反発を示す人もいる。

私は遠野が『遠野物語』を題材に、それなりに観光で成功しているのは、“キワもの”を売りものにしているからだといったことがある。それは遠野観光の目玉がカッパであり、ザシキワラシであるからである。しかし、カッパに行ってカッパに会えなくても怒る人はいないし、泊まった民宿の部屋にザシキワラシが出なくとも看板にいつわりありと目にカドを立てる人もいない。遠野観光は要するにこういうところに成り立っているのである。なまじ実体的なものを売り物にしたら、いまの数あるテーマパークのように失敗するのがオチであろう。

とにかく、こういう現代の『遠野物語』の世界を自分の眼で確かめてほしい。エクスカーションも別に準備はしないので、自分の足で心ゆくまで柳田國男が石狩の平野よりも広いといった遠野を歩いてほしい。『遠野物語』は自動車のなかった時代に成立したものである。とにかく自分の足で歩くのが『遠野物語』の世界に入る最もよい方法であると、私は信じている。皆さんが現代の遠野を歩きまわることによって『遠野物語』幻想から解放されるならば、遠野で大会を開く意味があるというものである。

遠野の地元にも、私は研修センターを大会と宿泊のため提供して貰う以上のことばはない。それは当事者がそれに要する費用を負担すればすむことであり、そうすることが地元に対する礼儀であろうと、私は考えているからである。